

I 教育委員会の事務点検・評価制度の概要(報告書 P1・2)

- 1 対象年度 令和4年度
- 2 法令上の根拠 地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 26 条
- 3 評価方法 教育委員会の権限に属する事項について、教育委員会が自らの事務の適切な執行について確認するとともに、点検・評価を行うに当たり、教育に関し学識経験を有する者の知見の活用を図っている。

※評価委員 学校教育分野：小橋 暁子（こばし さとこ）氏
千葉大学教育学部准教授 専門：造形教育学

生涯学習分野：岩崎 久美子（いわさき くみこ）氏
放送大学教授（前国立教育政策研究所総括研究官） 専門：生涯学習政策

- 4 重点的に評価する事業 [令和4年度の新規・拡充事業等から4つの事業を重点的に評価した]
※()は評価委員が視察・ヒアリング

学校教育分野・生命(いのち)の安全教育推進(千葉市立稲毛小学校)
・小学校ライトポートの設置(不登校対策)(小学校ライトポート中央)

生涯学習分野・加曽利貝塚博物館の管理運営(加曽利貝塚博物館)
・千葉市科学館の管理運営(千葉市科学館)

II 教育委員会の活動状況(報告書 P3・4)

- 1 教育委員会会議を 14 回開催し、51 件の議決を行った。
- 2 施設や行事の視察等を行い、事業の実施状況や、様々な課題について把握し、教育委員会会議における審議に生かした。
 - (1) 学校行事への出席
千葉市小・中・特別支援学校児童生徒作品総合展覧会(科学部門)、小学校陸上大会 他
 - (2) 各種イベントへの出席
未来の科学者育成プログラム、子ども議会、中学校生徒会交流会、科学フェスタ 2022 他
 - (3) 教員等の研究会や研修会への出席
教職員教育研究発表会、研究指定校研究報告会、長期研修生(委託研修生)研究報告会
 - (4) 教育委員会関係団体主催の会議等への出席
市町村教育委員会研究協議会
 - (5) その他
教科書展示会、教育功労者表彰式
- 3 教育委員会についての情報発信を行った。
教育委員メッセージ(市ホームページでの掲載)、高校生と教育委員との意見交換会
- 4 総合教育会議について
総合教育会議では、教育に関する大綱の策定や教育の条件整備など重点的に講ずべき施策、児童・生徒等の生命・身体の保護等緊急の場合に講ずべき措置について、地方公共団体の長と教育委員会で協議・調整を行う。
昨年度の総合教育会議は、令和4年度末で対象期間の満了を迎える「学校教育推進計画」及び「生涯学習振興計画」の改定案について議論を交わした。

III 点検・評価の結果(報告書 P5～P109)

1 教育委員会による自己評価

学校教育分野は「第2次千葉市学校教育推進計画」に、生涯学習分野は「第5次千葉市生涯学習推進計画」にそれぞれ基づき、各施策を実施しているため、両計画の進捗状況を評価することにより、点検・評価を行った。また、令和4年度の新規・拡充事業のうち4つの事業について、重点的に評価を行った。

(1) 全体の評価について

| | | 成果指標 | | | | | アクションプラン | | | | |
|--------|----|------|---|----|----|-----|----------|------|-----|----|----|
| | | ◎ | ○ | × | － | | 達成 | 概ね達成 | 未達成 | 休止 | 中止 |
| 学校教育分野 | 54 | 6 | 2 | 18 | 28 | 108 | 90 | 10 | 7 | 0 | 1 |
| 生涯学習分野 | 10 | 3 | 0 | 5 | 2 | 66 | 50 | 0 | 13 | 2 | 1 |

| 成果指標 | | アクションプラン | |
|------|------------------------|----------|------------------------|
| ◎ | 最終目標値 (R4 目標値) 以上であるもの | 達成 | 最終目標 (R4 目標) 以上のもの |
| ○ | 目標の概ね 8 割以上を達成したもの | 概ね達成 | 目標の概ね 8 割以上を達成したもの |
| × | 目標の概ね 8 割以上を達成できなかったもの | 未達成 | 目標の概ね 8 割以上を達成できなかったもの |
| － | 達成率で評価しない(できない)もの | 休止 | 事業を休止したもの |
| | | 中止 | 事業を中止したもの |

両計画とも、アクションプランの進捗状況は「達成」の項目が多い一方で、成果指標の達成状況は「◎」の項目は少なく、実施している取組が成果として表れていない傾向が見られる。成果指標の妥当性、成果指標とアクションプランとの整合性を見直すとともに、網羅的にアクションプランを並べることなく、成果指標の達成に真に必要な事業を実施する必要がある。

(2) 重点的に評価する事業について

ア 生命(いのち)の安全教育推進

子ども達が性暴力の加害者、被害者、傍観者にならないよう、国の事業を活用し全校種で「生命の安全教育」をモデル実施した。中学校等の子ども達へのアンケート調査によると、「性暴力にあったときの対応方法についての理解」の項目において、12% (事前) から 76.8% (事後) へと大幅な上昇が見られた。令和4年度からは毎年4月を「生命(いのち)の安全教育月間」と定め、全市立学校において子どもの権利リーフレットや生命の安全教育教材を活用した学習等を実施し、「生命の安全教育」の推進を図っている。

イ 小学校ライトポートの設置(不登校対策)

全ライトポート合わせて 313 名の通級児童生徒がおり、学校生活への復帰や社会的自立を目指す居場所としての機能を果たしている。小学生に特化したライトポート設置の効果から、通級児童が 31 名 (令和3年度) から 123 名 (令和4年度) と大幅に増加した。

ウ 加曽利貝塚博物館の管理運営

ホームページや SNS による積極的情報発信や、体験型集客イベント、初級から専門向け各種の講座を実施した結果、遠方からの来館・問合せなどが増加した。また、休憩施設「かそりえ」が今春開館し、雨天時、夏季冬季の見学者の利便性の向上や、体験学習会場としての有効活用が見込まれる。

エ 千葉市科学館の管理運営

科学都市戦略の拠点としての機能を向上し、「科学都市ちば」の実現を進めるため、令和4年5月～9月末で展示物のリニューアル施行した。リニューアル後の令和4年度下半期の入館者数が過去5年間で最大となった。

2 評価委員による評価

小橋委員の意見（報告書 P102～104）

全体について（総括的所見）

- ・令和4年度は第2次学校教育推進計画の最終年度、平成31年3月の中間見直しからの変遷を確認した。この期間は、ほぼコロナ禍での教育活動であり、工夫を重ねて各施策を実施したことが伺える。新たな視点や可能性に気づいたことや、意味を問い直すこともあったのでは。見えてきた課題を次の問いにし、実情に沿った施策へと繋げてほしい。
- ・数値での評価はしない主観指標の「分析・考察、今後の取組み」についても述べたい。特に「主体的に学ぶ力の向上」「豊かな心の育成」「社会的自立に向けた強い心の育成」「教職員の資質・指導力の向上」「特別支援教育の充実」「いじめや不登校の未然防止と早期発見・解消」「学習や社会生活が困難な子どもへの支援」での記載内容は、教職員が直接かかわる箇所だろう。そこで書かれている授業の工夫も様々な改善も教員と児童生徒が日々向き合う中での実態把握や理解から生まれる。今後、教員がそれらに取り組む時間や考える余裕が十分確保されているか、教育施策が学校や教員に必要以上の負担になっていないか実態把握をしながら計画をしてほしい。

生命（いのち）の安全教育推進

- ・「教育・啓発」「相談体制」「周知」「点検」の観点から実施内容について報告があった。千葉市の各取り組みについては、全国的に見ても進んでいるものといえよう。今後も、それらの仕組みや取り組みが、適切に機能しているかを検討してほしい。
- ・見学した授業では、児童が集中して取り組めるよう20分程度で行う工夫があり、内容も学年に合わせて実施しているということである。授業があることで児童生徒を通して保護者への啓発にもなるだろう。
- ・教育委員会で作成した資料が閲覧や配布だけで終わらないよう、指導の工夫を考えるための教員への支援や、新任教員も実施できるような情報共有、教材や活用可能な補助資料の充実も継続的に必要であろう。

小学校ライトポートの設置（不登校対策）

- ・不登校の理由の一つに絞ることはできないと言われ、児童生徒の状況等も多様になっている。児童生徒の状況に合わせて、支援内容を選ぶことができるよう、周知の在り方や各支援の接続等をその都度検討をしながら継続してほしい。
- ・設置先の小学校にはライトポートで学習指導ができる教員の加配が令和5年度からあり、小学校とライトポートを繋ぐ役割を担っており、設置設備や活動の実施等がより生きて動いてきたといえる。今後も加配の計画と実施を継続してほしい。
- ・指導員は全員非常勤職員であり、勤務時数の上限がある。各児童生徒の支援計画をたて、育ちを継続的にみるためには、指導員も児童生徒も安定し双方が信頼に基づく関係性を作るための環境整備が急務であり、指導員を正規職員とする雇用形態の見直しも必要であろう。

2 評価委員による評価

岩崎委員の意見（報告書 P105～107）

全体について（総括的所見）

- ・近年では、「社会人のための学び直し」といった雇用に関わる個人に帰属する学習が重要視されがちだが、地域に根ざした対話、関わり合い、協働を通じて培われる、生きがいや人生の豊かさをもたらす学習への市民ニーズがあることを、十分認識する必要がある。
- ・生涯学習は個人の自発性に委ねられるものであり、市民の施設利用の多寡を問うことは行政的には難しいことであろう。しかし、魅力的講座・イベントなどの周知により、よりアクセスしやすい施設づくりを目指して欲しい。

加曽利貝塚博物館の管理運営

- ・ホームページの「館長の考古学日記」などの内容は面白く、学術的内容をわかりやすく情報発信する積極的取組みを継続的に行っていることは評価できる。ツイッター（現在はX）による発信も加曽利貝塚を身近に感じる内容である。
- ・加曽利貝塚博物館へのアクセスが、近隣住民以外はバス、モノレール、自動車などの交通手段によらざるを得ないため、よりアクセスの良い施設を利用した出張相談室の開催が考慮されても良いように思われる。
- ・新しい博物館建設のグランドデザインに沿って新しい加曽利貝塚博物館が整備されていくことになる。新しい施設活用についてのコンテンツについては、事前に検討されることが望ましい。市民参画によるプログラム構築も一考であろう。
- ・図書館と連携し縄文関連の所蔵書籍の共同展示を行うことや、生涯学習センターと連携し成人向けの学習プログラムの一層の充実を図ることも一考であろう。
- ・市原歴史博物館との資源活用、交流等の連携協定を締結したことは高く評価できる。今後も、千葉市内外の学習の場との有機的連携により、加曽利貝塚博物館の意義を社会に広めてもらいたい。

千葉市科学館の管理運営

- ・展示物のリニューアル施行の際、研究の最前線で活躍する研究者に展示の監修を行ってもらったことは良い取組みである。
- ・大学・研究機関とのコラボレーションが展示のみならず、様々な面で展開されることが望まれる。
- ・製造業の基盤の町工場のものづくり技術等の内容もより充実すると、子どもに興味も持たせる契機になる可能性もある。
- ・科学の今を伝える学術性を持った「高度化」、学校教育への活用や市民の教養醸成といった「大衆化」という異なる二つのベクトルを持った戦略的方向性の実現は難しいことであろうが、科学館には難題に果敢に挑戦して欲しい。

3 評価委員の意見に対する対応（報告書 P108～109）

これまでの事務点検・評価において、評価委員より頂いた意見に対しては、全て取組みを実施し、適切に対応している。